

# 主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響 —高等学校運動部活動部員を対象に—

谷 本 英 彰<sup>†</sup>

## The Influence of Captain's Leadership on Other Members in High School Athletics Club

TANIMOTO Hideaki<sup>†</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、運動部活動における主将の役割を「他部員の動機づけ」という観点から検討することであった。高等学校の運動部員を対象に調査を実施した結果、主将のリーダーシップ尺度のうち「技術指導」「人間関係調整」および「統率」において、2・3年生と比較して1年生の方が優位に高い得点を示した。また、主将の「技術指導」に関する認知が高い部員ほど主将をリーダーとして受け入れる傾向が示唆された。しかし、「人間関係調整」「統率」および「圧力」については、動機づけに対して、有意な規定力を示さなかった。よって、主将のリーダーシップは他部員にはそれほど大きな影響を与えておらず、監督のリーダーシップ等、主将のリーダーシップ以上に影響を与えるものが存在するのではないかと考えられる。

キーワード：競技意欲，技術指導，キャプテン

### 目 的

現行の高等学校学習指導要領において部活動は「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と規定されている（文部科学省，2009）。また、文部科学省（2009）は部活動において大切なことは、生徒の自主的・自発的な参加により「生きる力」の育成を図ることであるとしている。しかし、近年では児童生徒数の減少に伴う部活動部員の減少が問題となっている（文部科学省，1997）。この部活動部員の減少につ

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 スポーツ健康学部スポーツ健康学科講師

草 稿 提 出 日 11月6日

最終原稿提出日 11月6日

いては様々な要因があるが、その1つとして退部者の存在が考えられる。彼らは人間関係や部活動への不満、消極性などを主な理由として部活動から離れていく（青木、1989）。これらの理由のうち人間関係に目を向けてみると、確かに、現代の若者には自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下などの傾向が指摘されている（文部科学省、2009）。

部活動離れを抑制するために人間関係を良好に保つには、その組織におけるリーダーの存在は重要である。渡辺ら（2011）は、顧問のリーダーシップへの満足は技術指導と人間関係の調整によって高められた結果、学校生活への適応感に肯定的な影響を与えていたと報告している。さらに渡辺ら（2011）は、集団凝集性と積極的人間活動は人間関係の調整と規範的指導によって高められ、雰囲気への満足も人間関係の調整によって高められており、それらが適応感と満足感の双方に肯定的な影響を与えていると主張している。以上の先行研究より、人間関係とリーダーシップには密接な関わりがあるといえる。つまり、高校運動部活動において部活動離れに歯止めをかけるために、いかに人間関係を形成または維持するかを考えると、集団の中で先頭に立つ者のリーダーシップが必要ではないだろうか。そこで本研究では、人間関係や部活動への不満による退部を抑制し得る要因の1つとして考えられるリーダーシップに着目した。

金井（2007）は、リーダーシップを「リーダーその人の中に存在するというよりはリーダーとフォロワーの間に漂うなものか」と説明している。リーダーシップは、産業界など、あらゆる社会的場面において業績を高める上では非常に重要なこととされており、それはスポーツ界においても例外ではない。例えば、サッカー日本代表の主将であった長谷部誠は2011年のアジアカップの初戦に引き分けたことにチームの甘さを感じていた。そこでチームの意識を変えるために2戦目の前日にミーティングを開き、自分の思いを選手たちにつけた。それから、それぞれの年代の選手たちが自分の考えを口にするようになり、緊張感のあるチームへと生まれ変わった。その後、日本代表は優勝し、大会後に多くの選手が「このミーティングが優勝へのターニングポイントだった」と話している（ウェブゲート、2011）。このようなことから、ザッケローニ前監督から「彼はこのチームで生粋のキャプテンだ」（フットボールチャンネル、2013）と評されている。また、日本マンパワー（2012）の新入社員意識調査「上司にしたいスポーツ選手」によれば、ニューヨークヤンキースのイチローが「言葉ではなく行動で示す」という理由で、サッカー女子日本代表の澤穂希は「リーダーシップがある」という理由で上司にしたいスポーツ選手で男女別の1位に選ばれている（マイナビニュース、2012）。特に澤は、ある試合前に「苦しくなったら、私の背中を見て！」とチームメイトに伝えており、試合後に後輩の選手たちは力強いリーダー

の言葉を胸に「最後まで全力で戦えた」と話している（日刊大衆，2012）。このような、澤の強いリーダーシップが2011年のドイツ女子サッカーワールドカップでの優勝をもたらしたといっても過言ではないだろう。さらに、元福岡ソフトバンクホークスの小久保裕紀氏は現役時代の功績や強いリーダーシップが認められ、現在では野球日本代表の監督を務めている。小久保監督はその手腕を発揮し、11月に行われた日米野球で、日本代表を24年ぶりの勝ち越しへと導いた。このように、強いリーダーシップを持つ人の言動は、そのチームに何かしらの影響をもたらしている。

このような現象は高校野球においても確認できる。7月から8月に行われる全国高校野球選手権大会を見ていると、新チーム始動から最後の夏の大会までの間にチーム全体に油断や隙があった際、主将がチームにしっかり喝を入れチームの雰囲気を引き締めるということもある。以下に朝日新聞（2010年8月15日）に掲載された群馬県立前橋商業高校野球部の例を示す。

この年、県内の公式戦で一度も負けることなく全国大会出場を決めたチームは力に自信のある選手たちばかりだった。しかし、群馬大会前に行われた練習試合で1-10で大敗した。その時、主将で捕手だった原田選手はメンバーを集め、「勝ちたい奴だけ残れ。ふざけてるんだったら、やめてくれ。」と厳しい口調でいった。それは正選手に声をかけるためだけでなく、ベンチに入れなかった選手にも気を配った発言でもあった。それ以降チームは練習でも気を抜くことはなくなったという。チームは全国高等学校野球選手権大会の2回戦で負けてしまったが、同級生の選手は「あいつがキャプテンでよかった。」と発言したり、後輩の選手からは「原田さんみたいになりたい。」と称賛されている（朝日新聞社，2010）。

このように、やはり高校野球においても主将の発言はチームを1つにし、好成績を収めるなどチーム内に大きな影響を与えている。

ところで、スポーツ集団におけるリーダーには、集団外部発生的リーダーと集団内部発生的リーダーの2つのタイプが存在する（村井ら，2010；Carron，1980）。村井ら（2010）はCarron（1980）の研究をもとに集団外部発生的リーダーシップおよび集団内部発生的リーダーシップについて説明している。村井ら（2010）の言葉を借りれば、集団外部発生的リーダーシップはコーチや監督といった選手外のリーダーであり、これに対して集団内部発生的リーダーはそのチームでリーダーシップをとる権限が与えられる主将のことで、能力等の関係やグループ内での推薦や投票により決定され、選手側から現れる者と定義で

きる。これまでも様々な業界におけるリーダーシップの研究が数多く行われてきたが、スポーツ界におけるリーダーシップに関する研究が行われ始めたのは比較的最近である。さらにいえば、それらの研究は、集団外部発生的リーダーを対象としたものが多く、集団内部発生的リーダーを対象にした研究報告は少ない。その数少ない研究を概観してみると、キャプテンのリーダーシップスタイルは競技成績に深く関わっていることが明らかになっている（山本、2011）。このリーダーシップと競技成績との関係について内村（2012）は、競技レベルが高いチームは現在のリーダーと部員が思う理想のリーダーに対する評価の差が少ないが、その差が大きいチームは部員の不満感が高まっており、競技レベルが低下する傾向があると説明している。また、吉村（1997）は、自己表現および自己主張を積極的に行う部員は部の活動や人間関係への満足感が高く、主将への満足感も高いと説明している。さらに、部活動に満足する部員は主将を肯定的に評価しており、充実した部活動を行うためには、主将との人間関係が前提であると説明している。

このように、これまでの集団内部発生的リーダーシップに関する研究は、選手のパフォーマンスとの関連や人間関係に着目したものが多く、動機づけに着目したものは皆無である。先に述べたように部活動離れに歯止めをかけるためには、いかに人間関係を改善し、選手の動機づけを高められるかが重要であり、集団内部発生的リーダーシップは選手の動機づけを高める一要因としての可能性を秘めているといえる。

そこで本研究では集団内部発生的リーダーシップを持つ主将が他部員の動機づけにどのような影響を与えているかを検討した。

## 研究Ⅰ 学年、部活動および競技出場機会別にみる主将のリーダーシップに関する差異の検討

### 1. 目的

高校運動部活動部員の学年、部活動種目、レギュラー選手と非レギュラー選手において、主将のリーダーシップに違いがあるかを検討することを目的とした。

### 2. 調査方法

#### 1) 調査対象

中国地方、九州地方の高等学校に在学し、運動部活動に所属している127名（1年生26名、2年生71名、3年生30名）を調査対象とした。質問紙の回収後、記入漏れや記入ミスのある回答を除外し、最終的に118名（1年生22名、2年生67名、3年生29名）の回答を分析対象とした。調査対象者には、現在のチームに対する影響を避けるために現

在のチームより1つ前のチーム時について想起しながら質問紙に回答してもらった。

## 2) 調査期間

平成26年6月から11月に実施した。

## 3) 調査内容

主将のリーダーシップに関する質問紙は、吉村（2005）の「主将のリーダーシップ尺度」を用いた。この尺度は、「技術指導」「人間関係調整」「統率」「圧力」の4因子20項目で構成されている。

回答方法は、「全然当てはまらない（1）」～「大変よく当てはまる（6）」の6件法を採用した。そのほかに競技能力、レギュラー・非レギュラーについて回答する項目を設定した。

## 4) 分析方法

まず、主将のリーダーシップ尺度の各因子の合成点を算出した。次に、学年および部活動種目別で主将のリーダーシップ尺度の平均値間に差があるかを一元配置の分散分析で検討した。さらに、レギュラー選手・非レギュラー選手において主将のリーダーシップ尺度の平均値間に差があるかをt検定で検討した。なお、分析にあたっては、アプリケーションソフトウェアSPSS21.OJを用いて統計分析を行った。

## 3. 結果

学年によって主将のリーダーシップ尺度の各因子得点に違いがあるかを検討するために一元配置の分散分析を実施した（表1）。その結果、「技術指導」、「人間関係調整」および「統率」において有意な主効果が認められた。そこで上記の3因子についてBonferroni法による多重比較を行ったところ、3因子すべてにおいて「1年生」が「2年生」「3年生」に比べ、有意に高い値を示していた（技術指導： $F(2/117)=5.550, p<.01$ ；人間関係調整： $F(2/117)=4.802, p<.01$ ；統率： $F(2/117)=9.168, p<.001$ ）。

次に、部活動種目によって主将のリーダーシップ尺度の各因子得点に違いがあるかを検討するために一元配置の分散分析を実施した（表2）。その結果、4因子すべてにおいて有意な主効果が認められた。そこで、すべての因子についてBonferroni法による多重比較を行ったところ、「技術指導」については、「バレーボール部」と「野球部」が「サッカー部」に比べ、有意に高い値を示しており、さらに、「野球部」は「バスケットボール部」

表1 学年別にみた主将のリーダーシップの平均値および標準偏差 (N=118)

	1年生	2年生	3年生	主効果	多重比較
N	22	67	29	F	
技術指導	33.827 (4.839)	29.645 (5.288)	28.552 (7.767)	5.550**	1年生>2、3年生
人間関係調整	26.191 (3.008)	22.600 (4.828)	22.483 (6.249)	4.802**	1年生>2、3年生
統率	16.691 (1.596)	14.096 (3.166)	13.138 (3.461)	9.168***	1年生>2、3年生
圧力	21.595 (5.819)	19.460 (4.762)	20.448 (5.661)	1.485	

()内は標準偏差

\*\*\*p&lt;.001,\*\*p&lt;.01

表2 部活動別にみた主将のリーダーシップの平均値および標準偏差 (N=118)

	バレーボール部	バスケットボール部	バドミントン部	卓球部	野球部	サッカー部	主効果	多重比較
N	21	12	2	3	41	39	F	
技術指導	31.248 (5.193)	28.417 (9.190)	30.500 (6.364)	24.667 (13.013)	33.834 (4.578)	26.641 (3.773)	8.251***	バレーボール部、野球部>サッカー部 野球部>バスケットボール部
人間関係調整	24.867 (3.405)	22.000 (7.173)	25.500 (2.121)	22.333 (4.163)	26.298 (3.329)	19.487 (4.466)	11.203***	バレーボール部、野球部>サッカー部 野球部>バスケットボール部
統率	15.867 (2.604)	13.583 (4.337)	10.500 (5.536)	13.000 (3.606)	15.912 (2.357)	12.410 (2.702)	8.578***	バレーボール部、野球部>サッカー部
圧力	17.005 (4.316)	16.500 (5.977)	12.000 (1.414)	12.667 (4.726)	23.441 (4.448)	20.351 (3.507)	12.047***	野球部>バレーボール部、バスケット ボール部、バドミントン部、卓球部、サッ カー部

()内は標準偏差

\*\*\*p&lt;.001

表3 レギュラー・非レギュラーでみた主将のリーダーシップの平均値および標準偏差 (N=118)

	レギュラー	非レギュラー	主効果
N	50	68	T
技術指導	29.104 (7.121)	30.929 (5.232)	-1.534
人間関係調整	22.664 (5.826)	23.665 (4.514)	-1.012
統率	13.788 (3.261)	14.753 (3.163)	-1.609
圧力	19.122 (5.221)	20.821 (5.135)	-1.759

()内は標準偏差

p=n.s.



に対しても有意に高い値を示していた（ $F(5/117) = 8.251, p < .001$ ）。「人間関係調整」についても、「バレーボール部」と「野球部」が「サッカー部」に比べ、有意に高い値を示し、さらに「野球部」は「バスケットボール部」に対しても有意に高い値を示していた（ $F(5/117) = 11.203, p < .001$ ）。「統率」については、「バレーボール部」と「野球部」が「サッカー部」に比べ、有意に高い値を示していた（ $F(5/117) = 8.578, p < .001$ ）。「圧力」については、「野球部」が他の5クラブに対して有意に高い値を示していた（ $F(5/117) = 12.047, p < .001$ ）。

最後に、レギュラーおよび非レギュラーによって主将のリーダーシップ尺度の各因子得点に違いがあるかを検討するために独立サンプルによる  $t$  検定を実施した（表3）。その結果、4因子すべてにおいて有意な主効果は認められなかった。

## 研究Ⅱ 主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響の検討

### 1. 目的

主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響を明らかにすることを目的とした。

### 2. 調査方法

#### 1) 調査対象

研究Ⅰと同様の生徒を対象とした。

#### 2) 調査期間

調査は平成26年6月から11月に実施した。

#### 3) 調査内容

研究Ⅰで使用した「主将のリーダーシップ尺度」に加え、動機づけに質問項目を設定した。この動機づけについては、吉沢ら（1991）が作成した「繰り返し可能な競技意欲検査（SMI）」を用いた。この尺度は、「やる気」「冷静さ」「闘志」「コーチ受容」「反発心」「不安」の6因子24項目で構成されているが、本研究では主将のリーダーシップを検討するため、「コーチ受容」因子を「主将受容」とし、項目についても「主将受容」を表す内容へと変更した。回答方法は、「全く当てはまらない（1）」～「よく当てはまる（4）」の4件法を採用して調査を実施した。

表4 重回帰分析の結果

	競技意欲					
	やる気	冷静さ	闘志	主将受容	反発心	不安
R(R <sup>2</sup> )	0.399(0.160)	0.231(0.054)	0.165(0.027)	0.333(0.111)	0.312(0.097)	0.271(0.073)
標準偏回帰係数( $\beta$ )						
技術指導	0.137	0.199	0.297	0.546*	0.381	0.229
人間関係調整	0.225	-0.243	-0.076	-0.142	-0.262	-0.186
統率	-0.005	0.080	-0.143	-0.045	-0.202	0.027
圧力	0.095	0.132	-0.005	-0.152	0.184	0.168

\*p&lt;.05

#### 4) 分析方法

主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響を検討するにあたりSMI検査6下位因子を従属変数、主将のリーダーシップ尺度4下位因子を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。

### 3. 結果

主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響性を検討するために、SMIの6下位因子を従属変数、主将のリーダーシップ尺度の4下位因子を独立変数とした、強制投入法による重回帰分析を行った。分析によって得られた重決定係数(R<sup>2</sup>)および標準偏回帰係数( $\beta$ )を示したものが表4である。

重決定係数(R<sup>2</sup>)の値は0.027-0.160の範囲であったことから、本調査において抽出された主将のリーダーシップの4下位尺度の分散は、SMIの下位尺度の分散の約2.7%-16%を説明していることを示した。また、標準偏回帰係数( $\beta$ )の値については、SMI検査の下位尺度である「主将受容」において、「技術指導」の独立変数が有意な影響性を示した( $\beta=0.546$ ,  $p<0.05$ )。

### 総合論議

本研究では高校運動部活動部員を対象に、主将のリーダーシップが他部員の動機づけにどのような影響を与えているか検討することを目的としていた。

まず、研究Iにおいて学年および部活動種目により、主将のリーダーシップの認知に違いがあるかを検討するため、一元配置の分散分析を行った。さらに試合への出場機会によ



り、主将のリーダーシップの認知に違いがあるかを検討するため、独立サンプルによる t 検定を行った。その結果、学年別に主将のリーダーシップの認知をみると、1 年生の「技術指導」、「人間関係調整」、「統率」の値が他の学年に比べて高いことが明らかとなった。このことから、1 年生は、他の学年よりも、主将のリーダーシップを強く認知していることが示された。これは、主将がチームのレベルアップとチームに馴染みやすい環境を作るために入部して間もない 1 年生に対して手厚く働きかけていた結果ではないかと考えられる。野上（1997）は、「学年が上がるにつれ、部員は指導される側から、指導する側へ立場が移行する」と説明している。さらに、鶴山（2011）によると、「1 年生は、人間関係を重視するという姿勢が強く認められているが、2, 3 年生についてはそのような傾向があまり認められず、部全体のことも個人を重視する傾向がある」と指摘している。本研究では、これらの先行研究を支持する結果が出ており、入部したての 1 年生にとって高校運動部活動における主将は、1 年生が部活動の雰囲気になじめるために、その競技に関する技術指導だけではなく、人間関係など、多角的にチーム全体を管理する頼もしい先輩として認知されているといえる。

次に、部活動別に主将のリーダーシップの認知をみると、「バレーボール部」、「野球部」が「技術指導」、「人間関係調整」および「統率」において他の部活動よりも高い値を示していた。このことから、「バレーボール部」や「野球部」の主将はチーム内のレベルアップや人間関係を良好に保ち、チームのまとまりを良くする働きかけを行う主将であったことが考えられる。さらに、「野球部」の主将は「圧力」においても他の部活動の主将に比べて高い値を示していた。千葉県立八千代東高等学校や福岡県立八女高等学校の学校ホームページより、部活動紹介を見ると、野球部は、部活動場面だけでなく、学校生活においても、他の生徒の模範になることを目標に掲げている。このことから、そのほかの高等学校においても、学校生活で他の生徒の模範となるような目標に掲げている野球部が多く存在していることも大いに考えられる。そのため、「野球部」の主将は、他の部活動の主将に比べて、練習時における服装や時間など規律を正しく守らない者に厳しい主将であったことが考えられる。また、「サッカー部」は「技術指導」、「人間関係調整」および「統率」の値が他の部活動に比べて低い得点を示していた。野上（1997）の先行研究では、団体種目と個人種目のリーダーシップを比較した結果、「大学生では、団体種目、個人種目によるリーダーシップ効果の差異はあまり顕著にみられなかった」としているが、本研究では、高校生において部活動種目の違いによるリーダーシップの認知の差異が認められた。この 2 つの研究の大きな違いは、対象者である。大学では、主将以外の部員が、運営など競技場面以外でも大きな役割を与えられることが多い。そのため、他部員も、リーダーシップ

を発揮する場面が生じ、主将のリーダーシップに対する認知が低くなったと考えられる。それに対し高校は、部活動種目によるが、主将以外の部員が大きな役割を与えられることが少ないため、主将のリーダーシップに対する認知が高くなったと考えられる。さらに、団体種目と個人種目の2つに分類し、比較を行ったことと一つ一つの部活動種目に分類し、比較を行ったという点も、この2つの研究において異なる点であった。これらのことから、先行研究とは異なる知見が得られたと考えられる。

さらに、試合への出場機会ごとに主将のリーダーシップの認知を比較したところ、有意な主効果は認められなかった。このことから、高校運動部活動部員においては、レギュラー・非レギュラーに関わらず、主将のリーダーシップに対する認知には大きな差異はなく、主将のリーダーシップを同様にとらえているといえる。

次に研究Ⅱにおいて、主将のリーダーシップが他部員の動機づけに与える影響を検討するために、SMI6下位因子を従属変数、主将のリーダーシップ尺度4下位因子を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、「技術指導」が「主将受容」に対して有意な正の規定力を有していた。「主将受容」は吉沢ら（1991）が示した「コーチ受容」の定義より、全般に指導を必要と考えたり、受け入れたりする度合いと解釈できる。つまり、技術指導を行う主将のことを他の部員は受け入れているといえる。また、「人間関係調整」、「統率」および「圧力」については、動機づけに対して有意な規定力を示さなかった。さらに重決定係数の値は0.027-0.160と低い値を示していた。鶴山（2011）は、「高校運動部活動は、監督がその運営から指導までを一人で担っていることが多い」と指摘している。このことから、部員は監督に頼ってしまう状況ができてしまい、監督のリーダーシップは絶対的なものととらえながら活動をしているといえる。よって、主将のリーダーシップは他部員には強い影響を与えていないのではないかと考えられる。しかし、各因子間の相関をみると、有意な正の相関が認められ、主将のリーダーシップと他部員の動機づけには関連性があることが確認された。このことから、本研究で想定したのとは逆の因果関係を想定する必要性が考えられる。つまり、主将のリーダーシップが他部員の動機づけに影響を与えるのではなく、動機づけの高い部員が主将のリーダーシップを肯定的に評価している可能性があるといえる。よって、今後は因果関係を考慮に入れたさらなる検証が必要である。

本研究の結果、主将のリーダーシップに対する認知は学年によって差異が認められ、さらに、部活動によっても差異が認められたが、動機づけへの影響を検討してみると、強い影響を与えているとはいえなかった。しかし、先行研究（山本，2011；渡辺ら，2011）でも述べてあるように、リーダーシップは競技成績の向上はもちろん、人間関係を良好に保つことで部活動や学校生活への適応感や満足感に影響を及ぼす大きな力を持っているとい

える。さらに、主将だけでなく、部活動の監督やコーチが強いリーダーシップを発揮すれば、現在よりもさらに良い部活動環境を作り上げられることが期待でき、学校生活における充実感を与えることができるだろう。そのためには、本研究の学年別のリーダーシップに対する認知で得られた結果から、2, 3年生に対しても1年生とは違う形での手厚い働きかけが必要であると考えられる。

最後に本研究の限界について述べる。本研究では、現在所属しているチームに配慮し、現在のチームより1つ前のチーム時について想起しながら回答してもらった。これにより、当時「2年生」だった3年生と現在の「2年生」を混合していた。そのため、学年別に主将のリーダーシップに対する認知の違いを検討した結果が正確であるとはいえない。このことから、今後は、調査時期の統一と調査や分析を行う際に学年を統一することが必要である。さらに、部活動別に区分して分析を行った結果、「バレーボール部」や「野球部」など、他の部活動に比べて有意に高い得点を示している部活動もあったが、「バドミントン部」および「卓球部」の調査人数が少なかったこともあり、本研究の結果すべてが妥当性のあるものとはいえない。よって今後、本研究の結果を確かなものにするためには、対象者の人数の増大や運動種目を特定して主将のリーダーシップに対する認知にそれぞれ違いがあるのかをより深く追究していくことが必要である。また、調査対象を大学生、社会人、プロスポーツ選手などに拡大したり、そのチームの競技レベルに応じて主将のリーダーシップが他部員に与える影響に違いがあるのかを検討していく必要がある。

## 文 献

- 青木邦男（1989）高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因．体育学研究，34（1）：89-100
- 千葉県立八千代東高等学校ホームページ部活動紹介 野球部 <http://www.chiba-c.ed.jp/yachiyohigashi-h/yakyuu.html>（2017年11月5日閲覧）
- 福岡県立八女高等学校ホームページ部活動紹介 野球部 [http://yame.fku.ed.jp/intro/pub/detail.aspx?c\\_id=56&redi=OFF&id=29&pg=1&lmst=9](http://yame.fku.ed.jp/intro/pub/detail.aspx?c_id=56&redi=OFF&id=29&pg=1&lmst=9)（2017年11月5日閲覧）
- 金井壽宏（2007）『リーダーシップ入門』62，日本経済新聞社．
- 木崎伸也（2011）「今はどこのチームに行っても、レギュラーになれる自信がある」『ウェブゲーテ』<http://goethe.nikkei.co.jp/human/110412/>（2017年11月5日閲覧）
- マイナビニュース「上司にしたいスポーツ選手，男性はイチロー選手，女性は澤穂希選手」<http://news.mynavi.jp/news/2012/04/24/135/>（2017年11月5日閲覧）
- 松谷昌典（2005）高等学校における体操部員のやる気を高める指導法の検討—チーム成績が不振

である体操部を対象に一、兵庫教育大学学校教育研究科 教科・領域研究選考 生活健康系  
学位論文

文部科学省（1997）運動部活動の在り方に関する調査研究報告（中学生・高校生のスポーツ活動  
に関する調査研究協力者会議）第3章 運動部活動の現状における課題 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/001toushin/971201.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001toushin/971201.htm)（2017年11月5日閲覧）

文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編、東山書房

文部科学省（2009）子どもの徳育に関する懇談会 子どもの徳育の充実に向けたあり方について  
（報告）2. 現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm)（2017年11月5日閲覧）

元川悦子（2013）キャプテン・長谷部誠が真のリーダーになった日、フットボールチャンネル  
<http://www.footballchannel.jp/2013/12/31/post19236>（2017年11月5日閲覧）

村井剛，猪俣公宏（2010）勝利志向型スポーツチームにおける理想のキャプテン像について、実  
験社会心理学研究，50（1）：28-36.

野上真（1997）大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因、実験社会心理学研究，  
37（2）：203-215

新宅あゆみ（2010）「前橋商，終盤力尽きる」『朝日新聞デジタル』<http://www.asahi.com/koshien/92/gunma/news/TKY201008140258.html>（2017年11月5日閲覧）

鶴山博之（2010）高校陸上競技部のモラルに関する研究、富山国際大学子ども育成学部紀要，2：  
87-95.

内村奈緒子（2012）チームにおける理想と現在のリーダーの違いが個人の満足感に与える影響、  
<http://sport.edu.ibaraki.ac.jp/semi/2011/29uchimura.pdf>（2017年11月5日閲覧）

渡辺弥生・大重啓（2011）中学生の部活動における顧問のリーダーシップが学校適応に及ぼす影  
響について、法政大学文学部紀要，62：95-112.

山本浩司（2011）キャプテンのリーダーシップと競技成績の関連性に関する研究—PM理論を用  
いて—、<http://libir-bw.bss.ac.jp/jspui/bitstream/10693/457/1/214%20%E5%B1%B1%E6%9C%AC.pdf>（2017年11月5日閲覧）

吉村斉（1997）学校適応における部活動とその人間関係の在り方—自己表現・主張の重要性—、  
教育心理学研究，45（3）：337-345.